

蒙古字韻の校訂と増補について

吉池孝一

本文就蒙古字韻の校訂和増補問題、通過分析蒙古字韻卷首的「校正字様」得到以下結論。朱宗文根據『古今韻會舉要』和『増修校正押韻積疑』校訂了蒙古字韻，同時也用『増修校正押韻積疑』增加了蒙古字韻的韻字併新加了注釋。

1. はじめに

蒙古字韻はパスパ文字で示された漢字音の下に同音の漢字を収めた韻書風の元代の書物である。刊本は既に無く、朱宗文の序を持つ写本のみがロンドンの大英図書館に伝わる。以下、大英図書館に伝わる唯一の蒙古字韻をロンドン写本(朱氏序1308年)と呼ぶ。

ロンドン写本の漢字部分は同音字が羅列しているだけであるが一部の字には注が施されている。これらの漢字の来歴は、互いに関わることの無い2つの論文によって偶然にもほぼ同時期に明らかにされた。即ち、被注字以外の大部分の漢字が『新刊韻略』(1229年)から採られたことは寧忌浮1992により、被注字が『増修校正押韻積疑』(1264年)による増字増注部分であることは吉池孝一1993による。

ここで、ロンドン写本の本文のから一例を挙げ、その体裁を見ると次の通りである。パスパ文字はローマ字に翻字し提示する。なおパスパ文字のローマ字翻字は脚注の方式による¹。義注は(舟名)のように記す。

1 2 × 3 4 ⑤ 1 × ② 1 2 ③
 daq [平] 當 鐘 艦(舟名) 簞 襠 璫 [上] 黨 党 讜 [去] 讜 當 擋
 (上十四 a)

¹ ローマ字右の漢字は伝統的な36字母。(子音) ㄱ g 見 ㄴ n 溪 ㄷ d 群 ㄹ r 疑 ㄷ d 端 ㅌ t 透 ㄷ t 定 ㄴ n 泥 ㄹ l 来 ㅂ b 幫 ㅍ p 滂 ㅍ p 並 ㅁ m 明 ㅍ f (ㅍ f1 奉 ㅍ f2 非敷。f1, f2の区別がない場合はfとする。1は旧濁音、2は清音。以下数字を用いるものは同様)、ㅍ v 微 ㅍ j 照知 ㅍ c 穿徹 ㅍ c 床澄 ㅍ ñ 娘 ㅍ š (ㅍ š1 禪 ㅍ š2 審) ㅍ ž 日 ㅍ j 精 ㅍ c 清 ㅍ c 從 ㅍ s 心 ㅍ z 邪 ㅍ 影 ㅍ h (ㅍ h1 匣 ㅍ h2 曉) ㅍ γ 匣(合)、ㅍ y (ㅍ y1 喻 ㅍ y2 幺(影)) ㅍ 魚(喻) ㅍ r ㅍ q (半母音) ㅍ ü ㅍ i (母音) ㅍ u ㅍ i ㅍ é ㅍ e ㅍ o とし、母音 a は補写する。

平声の 1, 2, 3, 4, ⑤は『新刊韻略』²の小韻「當(都郎切)」に収められた全ての韻字であり順番も一致している。なお、数字に○を付したものは最終の字。上声の 1, ②も去声の 1, 2, ③も同様である。×は今拠っているところの『新刊韻略』には無い字。『新刊韻略』に見えない字は2つあるが、最初の平声中の「艦(舟名)」は『増修校正押韻積疑』³によるものであり、これが後の増字増注であることはロンドン写本「廻避字様」末尾に「韻の中で細解したものは皆新たに付け加えた字である。」とあることから分かる。このような被注字はロンドン写本のなかに 108 字ある。次の上声中の「党」のような字は何に拠ったものか分らないが、寧忌浮 1997 によるとロンドン写本のなかにこの種の字は 86 字あるという。こちらは、最初からあるものか、それとも後の増補であるのか今のところ分らない。

そこで先ず問題となるのは「艦(舟名)」のような 108 字の被注字が何時増補されたかということであろう。寧忌浮 1992 は朱宗文による増補とするが確かな根拠は挙げない。吉池孝一 1993 は、増字増注は必ずしも朱宗文によるものとは言えないとする。即ち、現存するロンドン写本には複数の増字の層があり、『増修校正押韻積疑』による増字増注はその中の一つにすぎないと考える。いずれにしても決め手は無い。この問題は、朱宗文によって増訂される前の所謂原本蒙古字韻がどのような体裁であったか、そして原本蒙古字韻から発して、どの様な過程を経て現在のロンドン写本の体裁となったか、即ちロンドン写本成立までの過程を明らかにするために、是非とも解決しておかなければならない問題である。

この問題の解決のために「校正字様」に着目した。朱宗文は、パスパ文字の下に配された漢字の所属の誤を訂正して「校正字様」を著し蒙古字韻の巻首に配した。この「校正字様」と被注字の問題は一見無関係のようであるが、「校正字様」の内容の通りに本文が正されているか否かを検討することにより、被注字の増補時期を特定することができるとともに、関連する幾つかの書誌的な問題に光をあてることもできる。

2. 校正字様

² 『新刊韻略』は台湾国立中央図書館蔵善本、金王文郁撰、元大徳十年平水王氏中和軒刊本による。

³ 欽定四庫全書本による。

蒙古字韻には幾つか異なる版があったらしく、朱宗文はそれらを付き合わせて誤りと見なしたものを正した。その訂正の内容により4種の項目に纏め、巻首に「校正字様」と題して収めた。先ず、各本を通じた誤りの訂正（「各本通誤字」）、次いで各本に重複し誤って収められた字の削除（「各本重入漢字」）、更に湖北本と呼ばれる一本の誤りの訂正（「湖北本誤」）、浙東本と呼ばれる一本の誤りの訂正（「浙東本誤」）とある。4種の項目全てにつき既に検討は済んでいるが、『増修校正押韻積疑』が係わってくるのは「各本通誤字」だけのようなので、他は省略に従がい今回は「各本通誤字」のみをとりあげることとした。

・各本通誤字

- ①順を *ɕeun* とするのは誤りであり、正しくは禪母に従う *ʃleun*。
- ②藕を *·hiv* とするのは誤りであり、正しくは疑母に従う *ɣhiv*。
- ③俚を *p·hiŋ* とするのは誤りであり、正しくは幫母に従う *bhiŋ*。
- ④刪を *p·hiŋ* とするのは誤りであり、正しくは並母に従う *phiŋ*。
- ⑤搨を *mèn* とするのは誤りであり、正しくは幫母に従う *ben*。
- ⑥瘁を *zeŋ* とするのは誤りであり、正しくは喻母に従う *yaŋ*。

以上の6項目を順次確認する。

3. 各本通誤

「各本通誤」は各本を通じた誤りの訂正であるから、これは各本が拠った蒙古字韻すなわち原本蒙古字韻に有った特徴の訂正に言及したものである。以下ひとつひとつ検討する。

①順を *ɕeun* とするのは誤りであり正しくは禪母に従う *ʃleun* である、ということについて。

訂正の対象となる本文を抜き出し、『新刊韻略』によって所属韻と反切と字の順番を記すと次のとおりである。なお、②や③などの丸付き数字は小韻所属字中の最終の字であることを示す。校訂に関わる文字には*を付す。

1	②	1	2	③	1	②
ア <i>ɕeun</i>	[平] 唇 滄	[上] 盾 插 楯	[去] 順*	插		
	11 真[諄]食倫切	11 軫[準]食準切	12 震[稔]食閏切			

(下四bの1行目)

3	1	2	4	5	⑥
イ <i>ʃleun</i>	[平] 醇 純 尊 鶉 諄 淳				

(下四bの7行目)

それぞれ『新刊韻略』の小韻所属字を余すところ無く用いていることがわかる。アの反切上字の食は床母三等であり、イの反切上字の常は禪母三等であるから、パスパ文字が表す音とも一致している。『新刊韻略』をはじめ伝統的な韻書からみればアとイには何の問題も無いが、朱宗文は「校正字様」においてアの去声の順は誤でありイの去声に移すべきであるとする。照那斯圖・楊耐思 1987 はアとイに誤りは無く朱氏は何かの方言によったものであろうとするが、これは『古今韻会挙要』(1297年序。佚本『古今韻会』の簡略本)に拠る校訂とみることができる⁴。『古今韻会挙要』では「順」を「殊閏切、次商次濁次音である」とする。反切上字の殊は禪母であり、「次商次濁次音」も禪母であることを示すから、ここは『古今韻会挙要』によって訂正したとみなして良い。

もっとも、本文は「校正字様」の通りに直っていないわけであるが、それは、これを含む葉が朱宗文の校訂本ではなく、各本の一つが紛れ込んでいるためであろう。このことについては稿を改めていま少し詳しく述べるつもりである。

②藕を・hiv とするのは誤りであり正しくは疑母に従う phiv である、ということについて。

訂正の対象となる本文を抜き出し、『新刊韻略』によって所属韻と反切と字の順番を記すと次のとおりである。

1 2 3 4 ⑥	1 2 ③	①
ア・hiv [平] 謳 歐 甌 區 鷗	[上] 歐 嘔 毆	[去] 漚
11 尤[侯]烏侯切	25 有[厚]烏后切	26 宥[侯]烏侯切

(下二十bの1行目)

1 2 ③ ×
イ phiv [上] 藕* 偶 耦 漚 (芙蓉根)

⁴ 黄公紹『古今韻会』は散佚して伝わらない。この本を簡略にしたものが熊忠『古今韻会挙要』とされる。朱宗文の序に、『古今韻会』によって各本の誤字を校訂したことが記されているが、ここで指す書が『古今韻会』であるのか、それとも『古今韻会挙要』であるのか定かではないが、おそらくは後者であろう。いずれにしても、今は現存する後者に拠って述べるしかない。

(下十九bの8行目)

イに見える藕は、『新刊韻略』の反切上字の五からも分かるように、その声母は疑母とされるものであるが、おそらく当時の北方の漢語ではゼロ声母となっていたため、原本蒙古字韻ではゼロ声母すなわち影母として表記されていた。その原本蒙古字韻を反映した各本においても、やはり影母として扱われ・hiw となっていた。これに対して、朱宗文は疑母に従うのが正しいと述べるわけであるが、この判断は『古今韻会举要』の「語口切、角次濁音である。蒙古韻は影母に入れる」という記述によったものである。ここに見える反切上字の語は疑母であり、「角次濁音」も疑母であることを示す。先の順についてはその本文は誤ったままであったが、ここは「校正字様」の通りに直っている。

③俅を p'hiŋ とするのは誤りであり、正しくは幫母に従う bhiŋ である、④朋を p'hiŋ とするのは誤りであり、正しくは並母に従う phiŋ である、ということについて。

両者は連動しているのので共に扱うことにする。訂正の対象となる本文を抜き出し、『新刊韻略』によって所属韻と反切と字の順番を記すと次のとおりである。なお、×は『新刊韻略』に無い字。以下同様。

×	1	a	②	⑥	1	①						
ア	bhiŋ	[平]	崩	<u>閉</u>	<u>繡</u>	<u>枋</u>	<u>紘</u>	俅*	[去]	迸		
	1②	は	8	庚[甫]盲切	a⑥	は	8	庚[耕]比萌切	8	庚[耕]普耕切	24	敬[諍]比諍切
												(上十三aの3行目)

②	1	③			
イ	p'hiŋ	[平]	<u>烹</u>	<u>亨</u>	俅
	8	庚[撫]庚切	8	庚[耕]普耕切	
					(上十三aの4行目)

1	②	1	2	③	2	①	①					
ウ	phiŋ	[平]	<u>彭</u>	<u>棚</u>	<u>朋</u>	<u>棚</u>	<u>鵬</u>	弼*	[上]	位	[去]	位
	8	庚[蒲]庚切	10	蒸[登]---	8	庚[耕]普耕切	23	梗[耿]蒲幸切	24	敬[諍]蒲迸切		
												(上十三aの5行目)

アの俅、イの俅、ウの弼は、『新刊韻略』によると、「○俅(使人普耕切) 弼(弼張也) 俅(彈也)」とあるから、原本蒙古字韻では「p'hiŋ [平] 烹 亨 朋 棚 俅」

であったはずである。しかしながら、朱宗文は𠄎を bhij に、𠄎を phij にすべきだと言う。そして本文はその通りに直っているわけであるが、これは何に拠ったものであろうか。そこで先ず『古今韻会举要』を見ると次のとおりである。パスパ文字を示しその下に対応が想定される漢字を配する。

- ・『古今韻会举要』中華書局影印吉林省社会科学院図書館蔵明嘉靖十七年重修本

bhij 「𠄎(悲萌切音與崩同) 𠄎(使也) 𠄎(彈也) . . . 」

p'hiŋ 「烹(披庚切宮次清音) . . . 𠄎(彈也) . . . 」

phij 「彭(蒲庚切音與朋同) . . . 𠄎(蒲萌切音與彭同・弓彊貌)」

これによると、𠄎については『古今韻会举要』によって phij とすることができる。𠄎(使也)についても bhij とすることができる。これらは問題がない。これで「校正字様」の③と④は『古今韻会举要』で解決できた。しかしながら、𠄎(彈也)についてはどうであらうか。これは「校正字様」で言及されていないが𠄎と𠄎と𠄎の3字は同時に処理されたはずである。そして見ての通り𠄎(彈也)は bhij と p'hiŋ の二カ所に出ている。『古今韻会举要』のみにより𠄎(彈也)の所属を判断するのは困難であらう。そこで以下、試みに手元の韻書を見ると次の通りである。

- ・『集韻』中華書局影印北京図書館蔵宋刻本

bhij 「𠄎(悲萌切) . . . 𠄎(使也) . . . 」

p'hiŋ 「𠄎(披耕切) . . . 𠄎(使也) 𠄎(揮也) . . . 𠄎(𠄎弦弓聲)」

phij 「𠄎(蒲萌切) . . . 𠄎(弓強兒)」

- ・『増修互注礼部韻略』天理大学出版部影印天理図書館蔵至正十五年刊本

bhij 「𠄎(補耕切) 𠄎(使也) 𠄎(上同) . . . 」

p'hiŋ 「𠄎(披耕切) . . . 𠄎(彈也) . . . 」

phij 「𠄎(蒲萌切弓彊貌)」

- ・『附釋文互注礼部韻略』四庫全書所収本

bhij 「𠄎(補耕切) 𠄎(使也)」

p'hiŋ 「𠄎(披耕切) 𠄎(彈也) . . . 」

phij 「𠄎(蒲萌切弓彊兒)」

- ・『増修校正押韻積疑』四庫全書所収本

bhij 「𠄎(補耕切) 𠄎(亦作𠄎併使也) . . . 又本韻)」

p'hiŋ 「𠄎(披庚切) 𠄎(彈也又本韻) . . . 」

phij 「𠄎(蒲萌切弓彊貌)」

以上を見るに、『附釋文互注礼部韻略』と『増修校正押韻積疑』によるなら

ば、比較的容易に校訂することができよう。もっとも、後者の『増修校正押韻積疑』は蒙古字韻の増字増注に利用されたことが分かっている。そうであるならば後者を用いて校訂の参考としたと見たほうが無理はない。別の言い方をするならば、『増修校正押韻積疑』は増字増注だけでなく、各本の校訂にも利用されたというわけである。

⑤ ㄹを mèn とするのは誤りであり正しくは幫母に従う ben である、ということについて。

訂正の対象となる本文を抜き出し、『新刊韻略』によって所属韻と反切と字の順番を記すと次のとおりである。

	①	1	②	1	2	3	4	5	2	1	×
ア mèn [平]	眠	繇	綿	[上] 緬	沔	湏	黽	勛	勉	免	媿(順也)
	1 先[莫賢切]	1 先[仙武延切]	16 銑[彌彌亮切]	16 銑[彌亡辨切]							
	3	④	1	2	3	4	×	1	②		
	俛	冕	[去] 麩	麵	瞑	眇	覩	面	備		
			17 霰[莫甸切]				17 霰[線]---				

(下九 b の 8-9 行目)

	1	2	×	3	④	②	1	1	×	②
イ ben [平]	邊	籩	嘍	編	編	鞭	[上] 緋	編(小也)	扁	
	1 先[布玄切]			1 先[仙卑連切]	16 銑[方典切]					
	①	②	1							
	[去] 變	遍	徧							
	17 霰[線]彼眷切	17 霰[線]方見切								

(下十 b の 2 行目)

校訂の対象であるㄹは本文中にない。原本蒙古字韻の所収字の主要な供給源となった『新刊韻略』にもこの字はない。たまたま当該字が欠落しているのか、それとも「校正字様」のㄹは何か他の字の誤写に過ぎないのかということであるが、後者であろう。『新刊韻略』をみると、mèn に当たる上声の部分は「○緬(彌亮切) 沔 湏 黽 勛 編(衣急方緬切) ○雋……」とある。編には反切が付されており、この方緬切によると ben に当たる字であること明らかであるから、編の前には小韻代表字として○が付されていたはずであるが、この版本では欠落しており、そのため○緬のグループのように見える。もっとも、原本蒙古字韻の作者がこれと同じ版本の『新刊韻略』を見たとは

限らないが、mèn のグループの直後に編があったことだけは確かであるから、編を誤って○緬沔湏黽動とともに書き取ってしまうということは起こり得るし、実際にそのようなことであったのであろう。思うに、原本蒙古字韻の誤りを反映した各本は「mèn・・・[上] 緬 沔 湏 黽 勔 編*」のようであったところ、朱宗文は『古今韻会举要』の「○扁(補典切) 匾 編 編(俾緬切音與扁同(説文)衣小也・・・(廣韻)衣急・・・) 偏」もしくは『増修校正押韻積疑』の「○編(俾緬切以衣小曰編釋急也示也) 編」に拠って編を ben の下に収めたのである。この考えによると、ここでは「校正字様」の通りに直っているということになる。なお、ben の下に収めるときに、義注も付して「編(小也)」としたわけであるが、この義注は『古今韻会举要』の「衣小也」によったとしても良いし、『増修校正押韻積疑』の「衣小」によったとしても良い。この考えによると、校訂と義注の付与が同時になされたことになる。

⑥痒を zey とするのは誤りであり正しくは喻母に従う yap である、ということについて。

訂正の対象となる本文を抜き出し、『新刊韻略』によって所属韻と反切と字の順番を記すと次のとおりである。

1 4 2 3 3 2 1 ④
 ア zey [平] 詳 祥 翔 庠 [上] 橡 象 像 橡
 7 陽/似羊切 22 養/徐兩切

(上十六 b の 1 行目)

1 2 3 4 5 10 11 13 12 ⑭ 6 8 7 9 ⑤
 イ yap [平] 陽 陽 楊 揚 颺 揚 錫 瘍 駁 鴉 羊 佯 洋 痒*
 7 陽/與章切 7 陽/似羊切

1 2 3 ④ 1 2 3 4 5 6 7 ⑧
 [上] 養 痒 癢 養 [去] 漾 恙 羨 颺 揚 漾 養 養
 22 養/餘兩切 23 漾/餘亮切

(上十五 b の 6-7 行目)

イの平声の末尾に付された痒は、『新刊韻略』によると、「詳(似羊切) 翔 庠 祥 痒(病也)」とあるから、思うに原本蒙古字韻では「zey [平] 詳 祥 翔 庠 痒*」のようであり、それを反映した各本も同様であったはずである。それを朱宗文は喻母に従う yap に収めるべきであると言い、ロンドン写本ではその通りに直っている。例によって『古今韻会举要』をみると次の通りである。

・『古今韻会挙要』

zeŋ 「詳(徐羊切商次濁)・・・」

yaŋ 「陽(余章切羽濁音)・・・」 *影印本の校訂記は濁音を次濁音とする。

どちらにも痒はない。したがって、この書のみによって校訂することはできない道理である。以下、試みに手元の韻書を見ると次の通りである。

・『集韻』

zeŋ 「詳(徐羊切)・・・痒(・・瘍也)」

yaŋ 「陽(余章切)・・・瘍痒(・・頭創也)」

・『増修互注礼部韻略』

zeŋ 「詳(徐羊切)・・・」

yaŋ 「陽(余章切)・・・痒(病也)」

・『附釋文互注礼部韻略』

zeŋ 「詳(徐羊切)・・・」

yaŋ 「陽(余章切)・・・羊・・・」

「痒(音羊・・病也・・新制添入)」 *十陽韻の諸字の末尾に付されている

・『増修校正押韻積疑』

zeŋ 「詳(徐羊切) 祥 庠 翔」

yaŋ 「陽(余章切) 暘 楊 揚・・・痒病也・・・」

以上を見るに、『増修互注礼部韻略』、『附釋文互注礼部韻略』、『増修校正押韻積疑』のいずれも、朱宗文の校訂と同様である。もっとも、『増修校正押韻積疑』は蒙古字韻の増字増注に利用されたものであるから、これを用いて校訂の参考としたと見なして無理はない。先の③伴や④冊と同様に、ここでも『増修校正押韻積疑』を用いて校訂した痕跡を見出す事ができるのである。

4. おわりに

以上僅かな例によるのであるが、朱宗文が『古今韻会挙要』で蒙古字韻を校訂する際に『増修校正押韻積疑』も参考にしたということは、まずまず言えそうであり、今のところそのように考えて矛盾はない。そうであるならば、『増修校正押韻積疑』による増字増注も、朱宗文によるものであるとしたほうが無理はないということになる。

なお、これまで原本蒙古字韻という言い方を特に説明もなく用いたが最後に思うところを述べるべきであろう。原本蒙古字韻の本文については、ロン

ドン写本から朱宗文による増字増注部分を除き、校訂された部分を元にもどし、上下二巻に別れたものを一巻にまとめた姿を、そのように呼んで良いのではないかと考えている。本文以外の部分については、当然のことながら、巻頭の二つの序と「校正字様」及び「蒙古字韻総括変化之図」を削除し、「廻避字様」を「字母」の前に移動したならばほぼ原型となろう。

残された大きな問題は、散佚した元朝撰『蒙古韻略』なる書と原本蒙古字韻との関係であろう。『四声通解』所引の『蒙古韻略』が現存のロンドン写本蒙古字韻とは体裁を異にするらしいということは、既に遠藤光暁 1994 や中村雅之 2003 に見えるが、私は『古今韻会挙要』所引の「蒙古韻」も含めて、これ等の両書と原本蒙古字韻（ロンドン写本ではない）は異なる体裁の書物であったと考えている。更に言えば、『蒙古韻略』（＝「蒙古韻」）を簡略に組み替えたものが原本蒙古字韻であると想定している。このことは、稿を改めて述べるつもりである。

参考文献

- 照那斯圖・楊耐思 1987. 『蒙古字韻校本』北京：民族出版社。
- 寧忌浮 1992. 「《蒙古字韻》校勘補遺」, 『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』1992 年第 3 期, 9-16 頁。
- 吉池孝一 1993. 「『蒙古字韻』の増補部分について」, 『語学研究』(拓殖大学語学研究所) 第 72 号, 17-31 頁。
- 遠藤光暁 1994. 「『四声通解』の所拠資料と編纂過程」, 『論集』(青山学院大学) 第 35 号, 117-126 頁。
- 寧忌浮 1997. 『古今韻会挙要及相關韻書』北京：中華書局。
- 中村雅之 2003. 「四声通解に引く蒙古韻略について」, 『KOTONOHA』第 9 号, 1-4 頁。